

もしもの時、大切なパートナーと一緒に「生きる」ために



阪神淡路大震災から21年、東日本大震災から5年となる現在。もしもの時に大切なパートナーの命を守り、一緒に生きのびていくために、私たちが日ごろからしておくべきことは何でしょうか？

今回は、ペット防災専門家の特定非営利活動法人ANICE（アナイス）・平井潤子代表と、代官山動物病院の行動診療科・藤井仁美獣医師にお話をお聞きしました。

いますぐ活用でき、いざというときに役立つ災害時の備えかたについて、ご紹介します。

シミュレーションすべきポイント

- 複数の避難場所を考える
- 避難ルート
- 住宅形態（高層マンション、一戸建て等）
- 家族構成（家族バラバラで被災した場合）
- 家族間の連絡方法、集合場所
- 居住地域の地理的環境
- 自治体のペット同行避難の受入条件
- 飼い主が留守中の災害時の対処方法
- パートナーが行方不明になった時の対処方法
- パートナーの性格、健康状態、しつけ
- 防災グッズの優先度
- 動物が苦手な人への配慮



Check Sheet

命に関わるもの

- 常備薬（最低1週間分）
- 療法食（最低1週間分）
- 首輪、ハーネス
- リード
- キャリーバッグ、クレート
- フード（最低5日分）
- 水

持ちだしたいもの

- トイレシーツ、うんち袋、猫砂
- オーナーと一緒に映っている写真
- 健康管理票
(ワクチン証明書、狂犬病予防注射済票、ノミ・ダニ駆除など)
- パートナー手帳（病歴や常備薬、検査結果、かかりつけの病院名と連絡先、飼育に関する注意事項などの記録があるもの）
- 迷子ポスター（パートナーの写真と特徴が書かれた迷子ポスターを事前に作っておくと、万が一はぐれたときにすぐ掲示でき、役立ちます）

あとで便利なもの

- ケア用品（ブラシ、ドライシャンプー、ウェットティッシュなど。
抜け毛や臭いなどを防ぐため）
- ビニール袋
- 食器（折りたたみフードボウル）
- 毛布、バスタオル
- おもちゃ
- ガムテープ
- マジックペン
- カッター、はさみ
- テント
- ドッグブーツ

…携帯電話のデータにも保存しておく

準備

1 物の備え

災害が発生すると、ガス・水道・電気・輸送機関など、さまざまなライフラインが寸断されます。自治体や獣医師会などの大きな支援団体が動き出すまでに時間がかかりますし、物資が届いても自分やパートナーに適したものがあるかどうか分かりません。ですから、自分たちある程度しのげるよう、医薬品や食料などの「物」の準備をしていきましょう！



個体識別

命に関わる本当に大切なものから優先順位をつけて準備することが大切です。

1人が持ち運べる重さは6～8kgと言われているため、キャリーバッグなどで運ぶパートナーや人間用防災グッズの重さを加えると、必要なものすべてを持ちだすことは不可能です。

「命に関わるもの」「代用品がないもの」などから準備しましょう。優先順位が高いものは、人間用の防災袋と一緒にいれておくことをおすすめします。



- 個体識別の装着
- マイクロチップ
- 迷子札
- 鑑札

災害時にパートナーを守るために、まずオーナーである自分自身が無事でいることが重要です。災害はいつどんな時どんな場所で起るか分かりません。「家族全員が無事に再会し、そこにパートナーも一緒に居る」という状態にするために、自分のライフスタイルや家族構成、住んでいる地域の環境、パートナーの性格など、幅広い視点から「こういう時はどうする？」と細かく色々な想定をし、そのうえで何が必要か、何が課題なのかを考えながら、自分に合ったオリジナルの防災対策をしていくことがとても大切です。

例えば、一人暮らしで小型犬のパートナーと暮らしている人が外出先で被災した場合と、小学生の子ども2人と大型犬のパートナーと暮らしている家族がバラバラの場所で被災した場合、それぞれの避難ルートや対応は全く異なります。また住んでいる地域の自治体によって、ペット同行避難の受け入れ条件なども異なってきます。

大規模な災害では指定の避難所が使用できない場合や、災害の種類によっては避難所が危険区域に含まれてしまうこともあります。そのため、この避難所が使えない場合はここ、津波が起きそうな時は高台にあるここ、土砂災害が心配な時はここ、というように避難先の選択肢も複数考えておきましょう。シミュレーションを重ねることで、いざという時の心構えができるできます。

防災対策をシミュレーションする

準備

2

しつけや コミュニケーション、 方法や考え方 などの備え



「物」だけを揃えて安心するのではなく、中長期的な準備も必要です。例えば、災害時に困らないために「パートナーのしつけをしたり、信頼関係を築いておくこと」や、「いざというとき助け合えるために「近隣や社会との良好なコミュニケーションを図る」など、普段からできることを心がけ、実行しておくようにしましょう。

しつけ・トレーニング

同行避難や避難場所での生活をスマートにするために、日ごろから基本的なしつけができると役立ちます。パートナーに分離不安や吠え、攻撃性などの問題行動がある場合、普段からその子に合った改善方法を考えて対応しているかもしれません。



い主を信頼していれば、パートナーはどんな状況下でもついてきます

し、飼い主が自信を持って行動すればパートナーが不安になることもあります。パートナーとの距離が適切に保たれている関係をつくり、親の気持ちになつてしまつかりパートナーを守つていきましょう。

家族間、オーナー同士、近隣との関係づくりとコミュニケーション

災害時は周りの人たちとの共助が欠かせません。顔見知りの飼い主仲間や近隣住人と良いコミュニケーションが取れないと、問題が起こっても話し合いで解決できたり、助け合いがしやすくなったりします。

また、災害時に家族の意見がバラバラだとパートナーが不安に感じます。周囲と

のコミュニケーションだけでなく、家族が団結していることも大切です。

Check Sheet

※あなたはいくつチェックできますか？全部チェックできるように、普段から準備しておきましょう！

- しつけない、「フセ・オスワリ・マテ・コイ」などの基本的なしつけができる
- クレートに入って、おとなしく待機している
- 室内外、どこでも排尿排便ができる
- 飼い主以外の人に対しても、大きな音などの環境変化があっても、怖がらない
- 普段からストレスなくパートナーの本能や行動欲求を満たせている
- その子にあった問題行動の改善策を考えて対応している

もしもの時、大切なパートナーと一緒に「生きる」ために

災害時は人のことだけでも大変なので、「ペット」のことはなかなか同じ土俵にのりづらいのが現状です。そういう環境下で自分も家族も大切なパートナーも、共に災害を乗り越えて生きのびていくために、私たちはちゃんと防災対策が用意できているでしょうか？

ぜひこの機会に、自分にあつたオリジナルの防災対策を考え、備えていきましょう。

- 自分がパートナーをしっかり守るという自覚がある
- パートナーが安心してついていける飼い主になっている
- パートナーとの距離が適切に保たれている
- 家族間の意見がバラバラでなく、家族同士が団結している
- 身近な飼い主仲間や近隣住人と良いコミュニケーションが取れている
- SNSの犬猫仲間など、離れていても連絡を取り合える仲間がいる

同行避難や避難場所での生活をスマートにするために、日ごろから基本的なしつけができると役立ちます。パートナーに分離不安や吠え、攻撃性などの問題行動がある場合、普段からその子に合った改善方法を考えて対応しているかもしれません。

Check Sheet

- 人と動物の居住スペースの棲み分け
- 人と動物の動線分離
- 飼い主以外触らない等、飼育スペースのルール掲示
- 身体のケア(ブラッシング等)
- こころのケア(一緒にいる時間を増やす等)
- 排泄物、ペットスペースの掃除
- 散歩
- 繁殖制限(万が一、パートナーが放浪しても繁殖しないように避妊・去勢手術をする)
- 健康管理(ワクチン、ノミ・ダニ予防など)
- 排泄物の始末
- 人の生命、身体、財産へ害を及ぼすことを防ぐ
- 周りへの配慮・迷惑の防止
- 自然環境への影響防止

犬や猫が嫌いな人は必ずいます。嫌いな人は、動物の臭いや抜け毛、吠える、噛む、喰る飛びかかるなどの行為を不快に感じることが多いので、避難所では最低限、ブラッシングなどのケアをして抜け毛や臭いを軽減したり、排泄物やペッタースの掃除をして清潔を保っています。また、事故防止対策として飼育スペースには共通ルールを掲示しましょう。

避難所でのパートナーのケア

犬や猫が嫌いな人は必ずいます。嫌いな人は、動物の臭いや抜け毛、吠える、噛む、喰る飛びかかるなどの行為を不快に感じることが多いので、避難所では最低限、ブラッシングなどのケアをして抜け毛や臭いを軽減したり、排泄物やペッタースの掃除をして清潔を保っています。また、事故防止対策として飼育スペースには共通ルールを掲示しましょう。

同行避難・ 避難所について

ペット同行避難は、環境省のガイドラインで「飼い主責任による同行避難を前提」と明記して推奨されているが、受け入れ条件や対応は自治体によって異なります。このため、受け入れ拒否される場合や、受け入れ態勢がで

きかない場合もあります。
そんな時、すぐにはきらめたり飼い主の想いを一方的に押しつけたりするのではなく、その時その場の状況に応じて、パートナーと一緒に避難できる手段を考え行動しましょう。



本特集にご協力いただいた方

平井潤子代表
特定非営利活動法人ANICE理事長／博士（応用生命科学）
日本獣医学研究大学卒。2002年にANICE（ア尼斯）を設立。災害時の動物避難対策は平時の飼育管理やモラルに深くかかわることから、海外も含め各地の動物事情などの情報収集・発信を行い、複数の動物救援センターの運営にも関わる。日本におけるペット防災の第一人者。「動物防災3R」を提唱。
NPO法人ANICEホームページ | <http://www.animal-navi.com/>

藤井仁美先生

獣医師／獣医行動診療科認定医／ペット行動カウンセラー
1990年、東京農工大学卒。2001年、英国応用ペット行動学センターにて研修、公認インストラクター資格を取得。2007年には英國サザンブリトン大学院にて動物行動学を専攻し、2009年に英国にてペット行動カウンセラーのディプロマを取得。2013年、獣医行動診療科認定医の資格を取得、全国で数人しかいない獣医行動診療科認定医として代官山動物病院で活躍中。行動問題の治療、しつけ方指導、病気のパートナーの精神面のケアを専門に従事。



もしもの時、大切なパートナーと一緒に「生きる」ために
災害時は人のことだけでも大変なので、「ペット」のことはなかなか同じ土俵にのりづらいのが現状です。そういう環境下で自分も家族も大切なパートナーも、共に災害を乗り越えて生きのびていくために、私たちはちゃんと防災対策が用意できているでしょうか？

ぜひこの機会に、自分にあつたオリジナルの防災対策を考え、備えていきましょう。

同行避難や避難場所での生活をスマートにするために、日ごろから基本的なしつけができると役立ちます。パートナーに分離不安や吠え、攻撃性などの問題行動がある場合、普段からその子に合った改善方法を考えて対応しているかもしれません。

